

## International Symposium on Low Carbon Steel for the 90'sに参加して

田川 哲哉 / 名古屋大学工学部

1993年10月17日から21日まで米国ペンシルバニア州ピッツバーグで開催された標記国際会議に参加する機会を得たので、その印象について報告する。

開催地のピッツバーグは米国鉄鋼産業の中心地であることをご存知のとおりである。またそのため、一時は煙とすすとスモッグに覆われた“スモーク・シティ”と呼ばれていたようであり、“一番よい街の再建方法は捨てることだ”とまで言われた街であったそうである。そんなピッツバーグを再建したのはその当時の市長であったD. L. Lowranceであり、会議はそのD. L. Lowranceの業績を記念したD. L. Lowrance Convention Centerで行われた。本シンポジウムは300人程度収容できる2つの会場で行われたが、TMSのMaterials Week'93と同時開催であったため、31会場、合計600件を超える発表があり、全体としてかなり大規模なものであった。会場はダウンタウンの中心地に位置しており、周辺は古いレンガ造りの商店街と高層ビルが混在した独特の街並みであった。筆者も同様であるが、参加者の多くが宿泊したピッツバーグビスタホテルは会場のConvention Centerに隣接していた(2階は渡り廊下でつながっている)ため、時差ボケ解消のため講演のない時間にホテルの自室で休むことができ、ありがたかった。

本シンポジウム参加に先立ち、約10ヶ月前からTMSとの事務連絡を行ったが、その際の事務通知が通知予定日を大幅に遅れたり、また送られてくるはずの参加登録証が来なかったり、事務局側の混乱を予想しながら渡米した。しかし、現地での参加登録はコンピュータ端末とクレジットカードを使い、1000人あまりの参加者に対して混乱もなく非常に円滑に行われた。とにかくその手際よさと無駄のないシステムには感心させられた。

本シンポジウムは薄板、厚板などの品種にかかわらず、

<0.2wt%Cの炭素鋼に関するすべての話題を対象にしており、製鉄プロセス、析出、コンピュータモデリング、溶接、IF鋼など14にわたるセッション、合計80件の講演が予定された。ただし、このような国際会議ではよく耳にすることであるが、中国、ロシアからの講演はほとんどがキャンセルであった。しかも、そのほとんどは前もってキャンセルの連絡がなかったようで、毎朝行われるAuther's coffeeでchair manの困惑している様子がほぼ毎日見うけられた。このAuther's coffeeというはご存知の方も多いと思われるが、講演予定日の朝7時半に会場に設営された簡易食堂に講演者とchair manが集まり、自己紹介や自分の研究の特徴、その日の講演の進め方などを話題にして一緒に朝食をとるのである。このシステムは、講演するセッションをchair manを始め講演者全員で盛り上げるといった意味において非常に有益であり、またこのおかげで発表前の緊張をやわらげることができた。

講演内容の方は、残念ながら活発な討議となったものはそれほど多くなかった。これは筆者だけの所感ではなく、参加した多くの方々からも耳にした。鉄鋼研究において先進的な立場の国からの講演が比較的少なく、また、興味をそそるタイトルの講演であっても、あたりさわりのない無難な内容の講演が多かったためであろうと思われる。日本からの参加はNKKの和田氏、新日鐵の赤松氏と筆者の3人のみであった。世界的な不況のためであろうと思われるが、鉄鋼研究に関して世界をリードする日本の立場から考えると、もっと多くの日本人研究者が参加し、会議全体を盛り上げるべきであると思う。

余談になるが、シンポジウム初日の夜はTMS主催のレセプションが催された。ピッツバーグの町は3本の川の3重点に位置しているが、このレセプションはこの川を3時間かけてクルーズする船上で行われた。船内にはダンスフロアもあり、日本ではなかなか味わえない豪華な夜を楽しんだ。また、このレセプションを含め、滞在中ビールを飲む機会が多かったが、ピッツバーグではどこへ行っても“Iron City Beer”という銘柄が必ずおいてあり、鉄の町らしさを感じられた。時にはこのビールがアルミ缶で出てくることもあり、皮肉な現実に苦笑した。

最後に、本シンポジウムの出席にあたっては第20回日向方学術振興交付金があったことを付記し、感謝の意を表す。  
(平成5年11月22日受付)



写真 会場となったD. L. Lowrance Convention Center